

博士学位請求論文審査報告

2013年2月13日

申請者 佐藤賢

論文題目 記録と独立の系譜

—中国インディペンデント・ドキュメンタリー映画誌研究—

論文審査委員 坂井洋史 阿部範之 松永正義

本論文は1990年前後の中国における新しいドキュメンタリー映画の形成、展開をめぐる動きを、「インディペンデント・ドキュメンタリー映画運動」と捉え、その形成、展開の社会的、思想的背景、映画、テレビにおける制度的機制あるいは市場経済化と運動の関係、デジタルビデオの普及による運動の変化あるいは深化、あるいはドキュメンタリー映画そのものが本来的に抱える問題の中国の文脈における現れ、といった側面を分析し、インディペンデント・ドキュメンタリー運動の全体像を描き出そうとする試みである。

1 本論文の構成

本論文の構成は以下のとおりである。

序章

第1章 インディペンデント 中国 独立 ドキュメンタリーの出現

第1節 『流浪北京』と「尚義街六号」の詩人たち

第2節 「新ドキュメンタリー」という衝動

第3節 「独立電影」、「第六世代」、「地下電影」

第4節 第三代詩人の出現—詩とドキュメンタリー

第2章 テレビ体制と独立ドキュメンタリー

第1節 「專題片」の由来

第2節 オガワとワイズマン

第3節 ユートピアから現実へ

第4節 「体制」内の「独立」

第3章 デジタルビデオ（DV）と個人映画

第1節 デジタルビデオの普及と個人映画

第2節 「周縁」との出会い

第3節 カメラを持った女

第4節 映像の充実へ

第4章 映画を見る運動

- 第1節 海賊版からシネクラブへ
- 第2節 シネクラブ運動とネット空間
- 第3節 「見ること」から「撮ること」へ
- 第4節 「雲の南」の映画運動
- 第5章 中国ドキュメンタリーの試み
 - 第1節 記録と実験
 - 第2節 三峡を撮る
 - 第3節 記録と歴史
 - 第4節 映画を土地に返す

終章

参考文献

資料

2 本論文の概要

本論文の第1章では、ドキュメンタリー作家呉文光を軸として、インディペンデント・ドキュメンタリー映画の形成とその背景が叙述される。著者によれば80年代に自己形成期を迎えた青年たちは、89年の天安門事件の衝撃もあり、文化大革命までの官製の理想主義や、80年代のこれを批判しつつなおそれとは別の意味での理想主義に燃えていた潮流に対し、もはやそうした理想を信ずることができず、自らを取り巻く現実を直視しつつ、その中で新しい表現を模索せざるをえず、そうした80年代と90年代の違いこそが、90年前後に形成され始めた新しいドキュメンタリー運動の背景であるという。また映画の分野でも陳凱歌、張芸謀らいわゆる第五世代の作家たちが、寓話的手法によって中国の現実を批判的、審美的に描きながら、ある種の理想主義の枠内にとどまり、市場化の波に肯定的に乗っていったのに対し、賈樟柯ら次の世代の作家たちは、そうした「経験」の「詩化」を批判しつつ、より生活に密着したところで「現実」を直接的に表現しようとしたし、こけより時期は少し早いですが、朦朧詩派が既成の表現を全否定して新しい表現を求めつつ、結局は「民族」「伝統」といった大きな物語の中に捉えられていたのに対し、第三代詩人と呼ばれる80年代の新しい世代は、こうした大きな物語を否定し、日常のありふれた生活、言葉の中に降りていこうとした。こうした理想から現実へ、理想から生活へという思想転換の中で新しい表現を求めたということは、新しいドキュメンタリー作家たちと軌を一にするものであり、また呉文光と第三代詩人の于堅が、雲南での共同生活ともいべき濃密なつきあいの中から出てきたように、新しい表現を模索する広汎な「人的ネットワーク」こそが、さまざまなジャンルでの模索を支えるものだったという。

なお著者はこうした新ドキュメンタリー運動を担った青年たちを取りまく思想状況を叙述するに当たって、「人的ネットワーク」を構成する青年たちの個々の模索と出会いとを繋ぎながら、総体としての時代の雰囲気を描きしようとする、いわば露伴の連環体のような方法をとっている。著者が副題に「誌」の文字を使う意図はそこにあるものと思われる。

第2章では、このようにして出発した新しいドキュメンタリー作家たちが、山形映画祭などでの小川紳介やフレドリック・ワイズマンとの出会いの中でその方法や姿勢を学び、すぐれた作品が作られていったこと、80年代に急速に革新されていったテレビ・ドキュメンタリーも、つまるところナレーションを中心とするもので、映像は補完的な位置しか与えられていなかったのに対し、新ドキュメンタリーの作家たちは、小川やワイズマンの方法を取り入れながら、映像そのものに拠りながら自らの「生の経験」を表現しようとしたこと、また彼らはテレビの体制のなかにいわば寄生しながら、その機材を利用してゲリラ的に自らの作品を作ったのであり、市場経済の中で急速に再編成されつつあったテレビの体制もまた彼らを必要とするような余地を持っており、こうして彼らは体制内で人脈を利用して作られた独立の空間の中で制作を行っていたこと、しかしながらかれらの作品は体制のなかで発表することはできず、内部上映で相互に刺激し合い、また海外の映画祭で始めて観客を得るような状況であったこと、などが述べられている。

第3章では、90年代後半におけるデジタルビデオカメラの普及がドキュメンタリー制作の状況を大きく変えたことが論じられる。手軽な機材の普及はこれまで映像表現の機会に恵まれなかった多くの人たちが、ドキュメンタリー制作に関わるようになり、とりわけ女性のドキュメンタリー作家が増えることになった。多くの青年がビデオカメラを手に社会のさまざまな局面に入り込んでいくことによって、映像表現の場が大きく広がり、青年たちはさまざまな現実に触れることによって、自らの「生の経験」を記録していくことになる。とりわけ社会の底辺や辺境地域など社会的周辺に生きる人たちと青年との出会いの中から、多くの作品が作られていった。

第4章では、「映画を見る運動」としての中国におけるシネクラブ運動が取りあげられる。90年代に海賊版VCDが大量に出回るようになると、カフェやバーで映画の自主上映会が行われるようになり、2000年頃には中国各地にシネクラブが組織されるようになった。上海の「101工作室」、北京の「実践社」などでは、入手困難な映画を上映し、中国では上映される機会がなかったインディペンデント映画を上映した。そうした中で監督との交流会も行われ、作者と観衆をふくめた「人的ネットワーク」が形成され、それを母体として2001年には中国初のインディペンデント映画祭が開催された。インディペンデント・ドキュメンタリー映画はこうした運動の中で初めて一般的な観衆を得たわけだが、そうした観衆と作者との直接の関係、双方をふくめた「人的ネットワーク」が、新しいドキュメンタリーの制作を支えていくような空間は、90年代初めの新ドキュメンタリー形成期の精神的系譜をひくものだと著者は評価する。

第5章は、インディペンデント・ドキュメンタリー映画を映像表現一般の問題の中に置いて、そこでの中国的文脈を分析しようとするものである。著者は実験映画の伝統に乏しい中国映画の中で、中国ドキュメンタリーは、映画の原理に立ち返る契機を持つという意味において、本来実験映画がめざすべき課題に近づくものであるとし、三峡ダムをめぐるドキュメンタリーの提起した、大きな社会変化の中で何をどう記録すべきかという問題、また老女の語りの記録のみに徹するドキュメンタリーの提起する、「歴史」をいかに記録するかという問題、雲南のチベット族地区で活動する作家が、チベット族自身の撮ったホームビデオが、土地に住む人びとの生活の中で享受されていることに触発されて提起した「映画を土地に返す」という主張などを取りあげている。

3 本論文の成果と問題点

本論文は中国のインディペンデント・ドキュメンタリー映画に関する初めての体系的な研究であり、先駆者としての意義は大きい。対象とする作品はインディペンデントという形で制作され、個々の上映会でしか見ることのできなかつたものが多いゆえに、その全貌をつかむことは事実上不可能である。そうした条件の中で著者は、多くの関係者へのインタビューを行い、また上映会へも足を運んで、運動としての新ドキュメンタリーを臨場感を持って把握することができた。また多くのインタビュー記事や研究を再構成することによって、インディペンデント・ドキュメンタリー映画の形成、発展の過程を、歴史的に整理し、多くの問題点を顕在化させることに成功している。

著者によって提起された問題、たとえば 80 年代と 90 年代の思想状況の変化の問題、「人的ネットワーク」の問題、体制の構造変化の中で、体制からはみ出してしまうことによって逆に体制の周辺あるいは内部に体制から独立した空間を作り出してしまおうというこの時代に特有と思われる事態の問題、市場に入れられないことによって逆にシネクラブ運動という作者と享受者が一体となった空間が作り出され、表現の基盤になっていったという問題等々、著者によって顕在化された問題はいずれも 90 年代以降の中国における表現の問題を考える際に、重要な視角を提示しているものと考えられる。

またとりわけ第 1 章、第 2 章は、インディペンデント・ドキュメンタリー映画の形成を扱いながら、90 年前後の時代状況、とりわけその中で新しい表現を求めて彷徨する青年たちが、自らの表現にたどりつき、そうした個々の苦闘が期せずしてひとつの運動として集約されていく様子を、具体的に描写することに相当程度成功していることも評価できる。

だが本論文には問題点も多く、第一に、陳凱歌、張芸謀の二人で第五世代の監督を概括しているが、詳細に見れば第五世代の中にも著者のいう次の世代に近いものもあるし、また第五世代の映画監督たちと第三代詩人たちは、同時期に活動しているのであって、前者を 80 年代に、後者を 90 年代にひきつけて考えるのは、歴史的には問題である。総じてこうした問題は、80 年代という時代の複雑性が十分に理解されていないことに因るものであって、それは著者が 90 年代の論客の 80 年代批判に就きすぎていることに因るものと思われる。

第二に、論文中に言及されている小川紳介やワイズマン、ダイレクトシネマ、山形映画祭など中国外部のドキュメンタリーと比べた時に、中国のドキュメンタリーがどのような特徴を持っているのか、また第五世代の映画や朦朧詩の歴史的な意味と比較した時、インディペンデント・ドキュメンタリー映画がどのように位置づけられるのかなど、より客観的な分析、評価が欠けていることによって、論文全体が中国ドキュメンタリーへのオマージュのような形になってしまっている嫌いのあること。

第三に、見るものと見られるものとの関係、被写体に対するカメラの位置の問題の問題など、基本的、一般的な論点がやり過ぎられていることによって、個々の論点の指摘が深化させられないまま叙述が進んでいることも、研究としては問題であろう。

本論文は対象をもっと絞り込んで構成すれば、より完成度の高いものとなったと思われるが、著者はあえてインディペンデント・ドキュメンタリー映画の総体を叙述することを選んでおり、如上の問題点はそうした姿勢のしからしめたものとも思われる。そうした意

味では本論文の長所と短所は裏腹のものである。著者はあえて大きな課題に取り組もうとし、そこでの著者の取り組みが真摯なものであることは疑いないのであってみれば、上記の問題点は今後の著者の取り組みによって解決されてゆくであろうと、十分期待できる。したがって先駆的論文としての本論文の価値は高く評価しうるものとする。

4 結論

以上の審査結果に鑑み、審査員一同は、本論文が独創性に富むすぐれた論文であると認め、一橋大学博士（学術）の学位を授与することが適当であるとする。

最終試験結果の要旨

2013年2月13日

学位請求者 佐藤 賢

論文題目 記録と独立の系譜

—中国インディペンデント・ドキュメンタリー映画誌研究—

論文審査担当者 坂井洋史 阿部範之 松永正義

2013年1月28日、本学学位規則第8条第1項に定めるところの最終試験として、学位請求論文提出者佐藤賢氏の博士学位請求論文「記録と独立の系譜—中国インディペンデント・ドキュメンタリー映画誌研究—」に関する疑問点について逐一説明を求め、あわせて関連分野についても説明を求めたのに対し、佐藤賢氏はいずれも十分かつ適切な説明を与えた。

よって審査員一同は、一橋大学博士（学術）の学位を授与されるに必要な研究業績および学力を佐藤賢氏が有することを認定し、最終試験での合格を判定した。